

燕石
十種
事蹟
合考

二輯

四

4曾1
679
14



679
14

事蹟合考卷之一

目録

- 一 當御城の事
- 一 御城内誌の事
- 一 紅葉山 御宮の事
- 一 後後纏屋の事
- 一 漬物の事
- 一 江津御徒張の事
- 一 酒井家屋敷の事
- 一 奥州御殿の事

弘前監官濯
江氏蔵書記

志田氏
蔵書印

一 常盤橋の事

卷之二

一 山王祭の事

一 島首場の事

一 三飯山の事

一 佐久間の事

一 新徳和路の事

一 園田島初住居の事

一 道三河原の事

一 猿若部三節の事

一 茅場町の事

一 加茂屋敷并番町の事

一 中橋の事

一 兵服物高人の事

一 御三家并同屋敷の事

一 木石秋上の事

卷之三

一 神君御政所の事

一 加判光るの事

一 加茂清正并同屋敷の事

一 伊達家屋敷の事

一 内蔵家屋敷并海池の事

卷之四

一 堀田加賀守の事

一 実盛嫡流の事

一 亀戸柳清村店屋の事

一 西岡橋并沙茶菰の事

一 新大橋永代橋の事

一 女元橋の事并沙茶菰の事

一 本母守の事

一 上水の事

一 聖堂の事

一 龜戸明成の事

一 梅屋敷の事

卷之五 大尾

一 三繩大佛の事

一 布引観音の事

一 五百羅漢の事

事蹟合考卷之一

當御城の事



一 水戸家初謙倉大弟、紙之上略下銘の玉、おけ東常派と馬加
陸奥守并岩橋捕瀧と、可くおおめて合戦止附あり——相亦
京初おけ、津波江、可くて常縁を石返さん、あめめ

人皇而三代後花園院
御宇義政將軍も居せ 長祿元年丁丑の六月廿二日、滋川に馬佐義流を

大將とす——て武藏玉へ、あめめさうりあきハ公方のを位めて、代々
九列探頭の家なるまハ諸家もまき事、おおしひけふ也、祖父
又ハ馬佐義行ハ久——武藏の玉、可くめてあめめその時、うと、是

那蘇といふところを居城して今おひつゝすしてこの下を
行しけきかかす世人志かす人——とく義鏡と探題
城——ゆいの中知の通り武列上列の兵とも中知や城氏
古河公方と退治して上松と管領——関東を治へきの起
を解後を板倉大和守先達て中知り中知この中を中知けきか
上松方の兵とも混川反へ系會——て京公方の中知と水、
その事長祿元年四月上松修理太史持朝入道府若武列河城の
城を五立らるる左田佐中守質清入道持朝の家を
及漢の父武列岩附の城を
五立河馬大史持資道隆武列江戸の城を五立ける成氏も同年
の男永壽王寶徳元年己巳

花園院義政將軍の治世宝徳ハ三年めて終亨徳も三年
めて終る康正二年めて終り長祿と改元あり九年に終り
京初將軍義政公より亡父持氏の名改をとたまり謙倉よ
還任——居館と造営——同年十月元服——て丸馬改城氏
と稱をたす中知を右修理太史持朝ハ持氏と滅亡させける人

明る由(成氏)かく二つし家と起さき——由(出取)——
及胡と号——謙倉の居完と子長弾正少弼殿房女弱年
明きとも是を由つて所知武列河城女隠居と故女元來河城
に謀号ハ明記明り持節家を右田使申与賢法はさる明りら河城
乾の側河東一つと隔多り尾城とりふ所と主君よりの治政を
任——常女謙倉乃主君の居完女弟の殿房若年多る由
諸事とをわかしひ多りふきも今ハ判發——多りさきハ
中文女入ぬとりふ明り岩附も江戸も皆府々各の願知明り
ふき由女長祿元年主従息三人城鼻と五立多り明り
吳竟江戸明りつけ海隅の汐入田島明りつけ終ふ由——

云地明りさるハ 神君江戸と市五并さ明りさき——町田
畠とてハ凡八百石をかりの由費の外江戸なる——と津自慢
と種——事——至軍の傳ふ脱ふ友山岩淵夜話別集女も記——
多ると神田芝四若小丘の田町とりふさか 津入國ハ東田地を
明ら——町屋と——多り—— 右京より口碑女跡きり
一 人見又多播某 友元嫡女 曰傳云今世約九由襄門前の古樹を
諸人梳と啼ふ明りけいぬ——あの町ハ住居——多り各々の
門の横なりとも云云按さる小友山傳費くふくく長祿後まき
いまも農人とも住居——と傳きと知くく明り

一 江戸 御城門外八分正西の御櫓といふ、又士見乃御櫓といふ
友山堂傳人の志とくいふあり、是れは 御入國以後の五五
多り、一も、然れあり、今世西丸御休息間前の芝山古來より
乃護の取見山と云へ傳へ、又乃護高城在任の時の秋小
前庭と云ふ、何れと云く、是く、海ちか

又士此う根と郭端めそん

道灌上洛の日記云 敵陣お遠く、多りといふ事、是
ま、古今天下の口碑お立、凡未代目、中玉中の城郭大

石をり、川て、墨揚げ瓦鱗をひて、屋葺と云ふもの、ハ、石屋太閤
治世天正以來の信稱お、ま、り、とも、た、れ、と、先、任、長、の、安、土
の城小、天守を、卷、玉、き、多、り、ハ、彼、城、一、所、の、一、宮、也、一、て、諸、小
あ、ま、り、か、い、ん、か、の、余、ハ、ら、ね、七、堀、板、瓦、葺、戸、め、ら、ら、て、葺、束
めて、堀、の、屋、根、を、葺、束、多、り、城、是、多、り、一、江戸、城、も、天、正
御、入、國、後、奉、入、一、今、の、下、京、橋、あ、ら、り、お、何、り、し、大、門、の
葺、戸、め、て、あり、一、老、軍、敷、度、中、傳、へ、多、り、也
御、城、乃、護、在、任、の、日、卷、玉、多、り、夫、余、と、て、も、江戸、町、享、保、中、以、來

言ニ夫入尺半つゝお造り多々火足櫓とある〜製と改と〜
を今の家士見失倉けはる確以來城の言ふおぼへりおき〜
ゆの強り多々お造りも中云圖前并度櫓ハ慶長河造營の
時京都大工の舟並小並造りま〜およめてこの名ありと
り

御城内法守の事

一 天正十八年八月 御入國を拒む節 柳永式部太輔及後名
御入國一三昧の由用取りめてその介下おま山及龍及伊系

徳義及板倉口節右馬及その介そまきまての御所知冬遠後甲
ハ徳義及板倉口地方役人元の後ハお〜江戸へまかり敬まきむ
ハ御出ゆと知りそ節 御城内おは先城主遠山右馬居
完その修めてお残りまきありととも永〜龍城の中ハ
於直ハ故ま〜く破換〜およひその上おぬきおは多々
龍根の上と龍城の節七めてお〜おめ方そのも〜おめて
西々おおもも磨り果〜とま〜くハ修後ハ 伊介諸役
人並夜骨を折ぬ〜 御入國のるお合〜と有〜後と長河

表を捕りて甲州の代友元の子代を捕りてあし屋の主人の
かゝりぬ。

権現様小田原表より 河内城へ 河内より抱ゆ節 柳原
式部太輔及とらぬ 石高城内法守の社にたきかへり
と 御尋ね抱ゆ節 式部及よりよひ定て法守の社も
ありゆきあきより小の方お高り曲輪の内におさき社
友社おんえいとの養女おとらぬら 河内より抱ゆより
式部及の案内ぬら 入ぬよ小坂の上お梅の木をぬら

極まり〜その内お宮立友社たきありゆき 河内より抱ゆ
及権ハ秋人ハ天神の社と建立〜ありと作ぬて残る
の社の額をも 河内より抱ゆてたぬら 河内より抱
式部〜 叔も不忠候ぬ事のみハとの 作らつて式部及
河内〜と系ゆゆの高城の法守の中〜あらぬぬきおあて
坂お山王と幼徒たきと思ひつるお山王の中〜ら
建直ふらと 作ありけきハ式部承り〜き 作のた〜奇
ぬぬる養めていし〜子 河内城内長久河内家お繁昌の内書瑞

中津藩のとき中上ゆめは海のか津機嫌の津指子と知り下略
古来は 津が丸と二の丸の百廿幅七万ありありおんえ
中か〜 堀あるといきありいともい埋させと知りよ〜 丸
萩のい菅徳の前水の丸のうらめさきありい山王の社
を八紅葉山へ引移〜 萩小の 作舟宮が〜 とも知りよ〜
萩小の建立と知り天神の社のまはい水法もさき知りふ
舟の菅徳の舟人お知りよ〜 中て平川は津田かの
津田堀へはさしよ〜 友社の海梅の木を〜 とも知りよ

よ〜 とも知りて今小梅林坂と中おきいと知りその後
秀忠公の舟子孫方 津誕生と知りてハ紅葉山の山王
津系諸と知り津機嫌能 津成長と知りとも知りて諸大名諸
中津が町方までも紅葉山へ氏神訪仕り〜 とも知りて
中津 秀忠公社政も能操り津建立と 舟舟只今お知りて
その社の上野にお残りさきありいと知り天神の中〜 とも知りハ
平川町の紅葉陣別当あり度と預し業師堂の斤服よ後〜
並いとも知りその町屋も津田地お知り鞠町道へ 引いとも知り

天神の社も引移し平川町の天神とやして今ハ餘社の
社殿とあり上野の御つまの御支配と相きり古來よりこの業
御堂ハ彼の社内ありとあり

紅葉山 御宮の事

一 紅葉山 御宮は 家光公御建立なり元和四年淺茅寺
内御建立の 御宮 御神所と 御遷座なりと云きありて
右 御文の巻ハ只今ありて諸事と淺茅寺よりとお知れ
なり淺茅寺にて 御宮の跡と云今程観音堂（系りあり）

左の方の淺茅大明神の社云きありて遠ハ竹藪の云きあり
い遠中とて皆ありて 御宮跡の云々 御宮所の巻ハ
惣ありてあり 御宮（系りあり）門前ニ掛りし石橋只今
ありてお踏し云きありし云々 御宮跡の護摩堂ハ
御宮跡の節も焼残し今程ハ不動堂ありし云々あり
なり

後友徳殿御事

一 大猷公竹千代君と申す 時ハ後友徳殿御事ニの忠臣ありて
御事ありし云々云

其方思を忘るゝ母於て不悪なるの佛符を二蒙者也

後後維反助

竹千代丸と多抱多りの今小所持と云云

乃權社の事

一 古を讀め日未代めむて紅葉山 佛宮後々唐洞の巻居立
多々稻荷一祈法彦なり古き元來尚
佛城の宗基乃權をいそむ多々社めて乃權の宮と姓古は
祿して今の中氣橋の介小の方下由勘定正二の丸あり

古きありはねと云神

佛城内舊儀の前刻冊新く佛移しありてよるに來
法彦し流りて云々

淺草の事

一 淺草の雷門と俗よりいふは遠か後の新造なりむりし今
山門一町をかり前右の方の乃東水室の海なりさねん今
武士馬止めて通ふなり古きよりいへるなりといふ
一 今の並木町と云い 大猷公の末よりハ松の並木めてその

ねまきの乃女ちぬありてその窓よりとる後第籠と出して
いとねま居ある新なり

江城市滝張の事

一 慶長十九年以來 江城市造営の時越中滝ハ

台徳公の御自身おまはる大寺下紫橋西九下介橋田中(龍門)
おまはるてハおまはるくく

台徳公の川滝張なりと平川口竹橋の
造り堂依渡する虎滝張なり竹橋と平川橋との乃小節
曲橋と五ノ事ハ切者の下あのみよ〜なり四谷門の横本戸

喰遠門小昌部番昌盛滝なり先年より井仔掃初取下飯の後
彼本戸門際の本くたハ部番逆茂本と〜して植〜りあ
今おまはる教株志けりあるなり

酒井家屋敷の事

一 大猷公時代より今の大寺の門中部定取の代酒井横波と忠指
居飯なり寛永年中蒲生家以渡お〜りてその屋敷就の口
東南の角おまはるありしを跡取〜して後相せり〜とま〜その屋敷
蒲生秀行の時ハ 台徳公 沙城よりおまはるの經營なり

表門諸家のよももきく冠本通りみよ欄楯を付て屏漢
二十四孝の人の形家屋山岩樹ねとの歌物志しき今浪をちり
その内のた右の柱めは金をとりて夜をよより下へ這せあり
ゆりとも花系ともよ金めてえね歌物しきゆり諸人世門
の花懸藤をりてゆき事を忘るしき日差門と仇名をつけあり
とゆり酒井忠勝世屋費小移居住せしきところの所歴三丁五戸
大火お焼焼しきゆりその後酒井氏も子孫めむり屋費移入
しきゆりあましき老中の移住しきゆりゆり

奥列街屋の事

一 御入國以前奥列街屋の女住還と申はお控國馬入川と方より
福光池とを通り今の丸下へ出て女町通りみかきと旅籠町を
おみおきて小傳言町むりしハ号と通り浅草親善堂の門前を通り
花川戸押揚より古三若古隅田とゆりかきと住来せしき
ゆり

常盤橋の事

一 大猷公御代より今の常盤橋の名を大橋と唱へありしもの

谷はおも〜ろか〜の政名を〜この 上意か〜りてい
ゆる向寄ゆや町奉寄の奈良屋市右衛門也 命や〜ふ志か
かそのころ市右衛門方か其の宿〜居多の浪人たりし市右衛門
世ののそまの〜考へさや〜め常盤橋とりし祝名を秋や〜
よるに永く彼橋は名と知らまじり

大ましの全集集大支典傳の秋也 橋の上の藤

色くぬきし川かよそて東海の

常盤のそ〜かか〜る友知〜

とりしつらりと五きると名盤の橋は道江かあると知り

事蹟合考卷之一 年

事蹟合考卷之二

山王祭獲之事

一 台徳公御代元和元年初て六月十五日江戸山王産土の町中へりふ
 及を以その外も粗借町より祭礼の出——祈りもの等
 御城内を至け橋田本宮よりと渡——ヤ——きよ——と 仰有
 けりとおの——おのし——お出——祈り物をお渡——大傳
 り町よりと左殿の上お鶴の参りある出——と渡——と
 台徳公又十三万の御多門よりと渡あつてとぬりら 上意申ハ

御被若源多不勢るといふ左平の世といふいぬりけ出——と
 もつて末代おつてとまて一昔お渡やとありしと今も
 いつてまて 上意のま——

島首場の事

一 御入國の御まては在町に目島首場ありしと——とまて
 して山王明神の御祭後ともお神樂おびお祭物おまて
 今おつてと渡——とぬりといふ

三縁山方太厩代系譜

一 當寺弟創之地者貝塚今糞町と名申以後而于日比谷也

後慶長初移而于芝云云

略中

彼學ノ餘隙愛_不耽_不和歌故與太田左金吾

道灌為親友

坊上寺長老

音卷

海上白雨

音あゝき灘の汐路の波風也

かきこむじり夕多らのそら

深山納涼

いりかせんまゝもこひあんなまは日の

りぬ深山のまねの下庭

連夜待意

い川きさそかきり形もまゝゝゝ款るゝと

月かかろりてあゆのそら

右三首載余集石田橋津守資宗家本在と申略

天正十八年

大相國家康王願_二関八_一列入御武江府始_レ謂_レ

仰為檀越慶長三年戊戌八月移寺地芝今地也

右京傳の文不遠一字寫し知は是抑し歴代傳と云書は京師及び
筑紫國^東水玉で淨土一宗の本山寺に檀林等の誼侶代々の事
實記したる記證ありて坊上寺方丈の納の並ところの大誦
了淨土一宗の寺傳におめて天卜舟この書の介まゝ他ありん
慶長十巳巳年女堂四扉等を浄道堂ありし大伽藍と稱ふ
もの今ありたり存在をふところ後略しこの堂の惣柱柱の本
とありて淨土したるを載おめても不折なりと云云
坊上寺の大誦 最前公の浄代すて凡七度りりきやんよつて

鉄炮田用流布衣井上元祖外記あり 作付何年この浄の
永代破きさる地合とすまひしとまきむの事 作付はとこ後と多んと
しる加の入きりり永く破き中海しきやんよつて
まねりら浄土作推名作あり 作付右のの事と入き浄立の
ところ今ふむりかしむひしきつるの十里かひしきいなり
平川浄教山の娘浄浄松とてあり

佐久間事

一 佐久間事ありは 浄土國以氣より江戸下宿の同屋めて代
大傳り町母伝を各主平八とありしものありて且て町奉告と

りよりのあゝ今この家跡流かり依久る。住居は大傳所
めては古き形——依久所今おまゝ池といふ所なり。住居
の地なり。寺は坊上寺中心光院なり。

新徳治路の事

一 神君天正十八年 御入國と相いふ日お新徳の治路濱へ船路の
通路の早速は 作舟堀通——中むき多ら海ら船路出来
い——中むき今の高橋通りなり。あれは甲州武田信玄
初もまきい小田原より治路舟通ひて玉中上下とも小船義
い——いともいひて 神君迅速舟新徳の治江戸入いよと

ねさ——め流り

園地通の任所の事

一 釋多の改宗は通は
御入國前今の女通り室町三石町の辻あり。地代 居位
仕いこの下為よよりて今めり。彼のの——の釋多院心とて
彼辻舟出て賣と云云

道三河原の事

一 及三河原は 御入國後枝本高野を形——てありと後年彼
地武家屋敷と相いふあり。御城東外へ出まゝいもの今の女枝本

町が里さきハ女字と添へ唱へたりと云云

様若部三節事

一 新我木町母居任ヤ〜豊懐の那造りの果円山平多信といふ
もの後りりりハ私仕年のらり様若部三節小形きかの者乃
先祖書と一巻子徳ハ今小彷彿なり〜是る趣とてりりもの
也たて外餘説を記すと

元祖

○ 道順

様若

平多信云け者その名と様若とのミりハ
外ハハ〜いきと云云

二代

宗月

部三節

平多信云者様若と苗字と〜て様若部三節といふ能く母居
右圖取立りき〜中村式初補一氏或拾万石附の大各ありり
その子一学早世子孫あり〜て永く以絶ヤ〜其の一族
中村次有義と云者ハ戸母流治〜りこの治右あり娘二代目
部三節母嫁〜て男女の子と産む後年様若の苗字を改て
彼治右あり名字を利して様若部三節と名宗末と〜りて
子孫盡く中村といて苗字とよと云云

三代

明石

中村氏

母中村治右娘

天津七節右馬妻

女子
母右馬

天津七節右馬は京極若狭と云ふ家來彼家を出て
後河原者と相りしり流石相りしり也二代目中村
勘三郎聲と云ふより中傳入り

七三節

中村氏
母二代目中村勘三郎娘

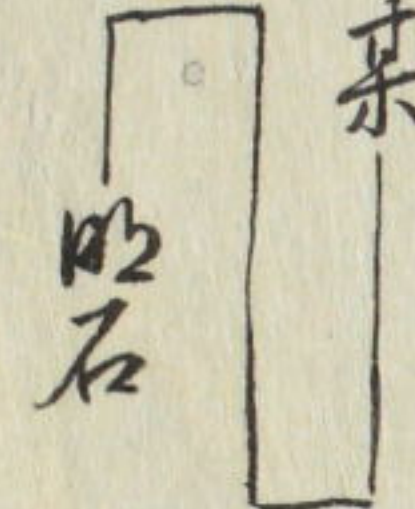
是様若今松安舟の名人實永六己丑年二月六日死後
法名 日栄母方の苗字をとりて名乗たり

七三節

實ハ日栄妻の甥
延享中父の様若を継て勤む

某妻

女子



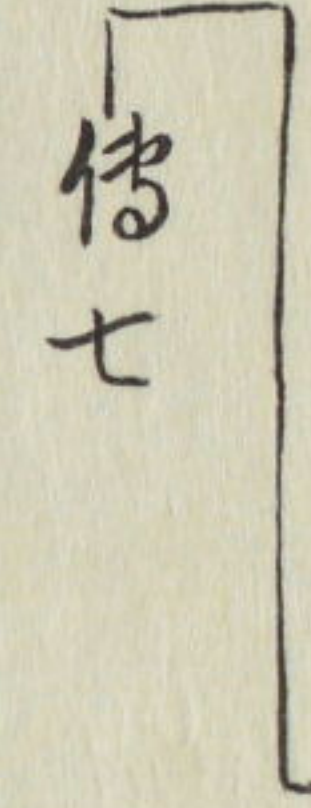
勘九節



長太郎

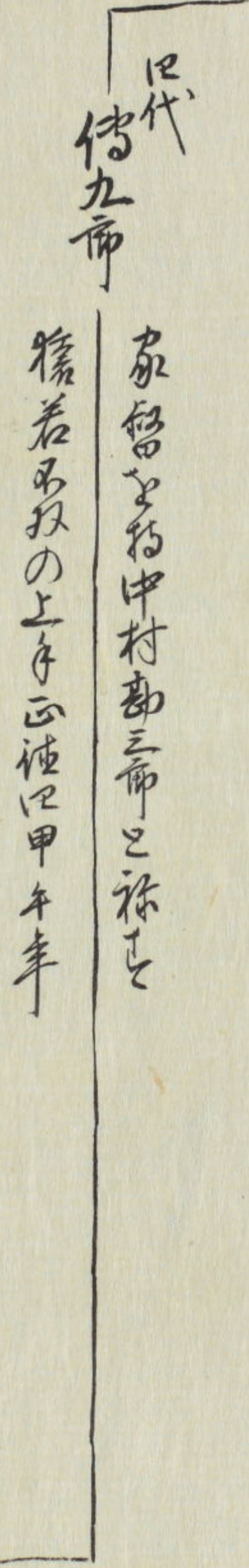
勘三郎

仁右衛門



傳七

女子
 吉住平右衛門妻
 吉住
 平右衛門
 傳八

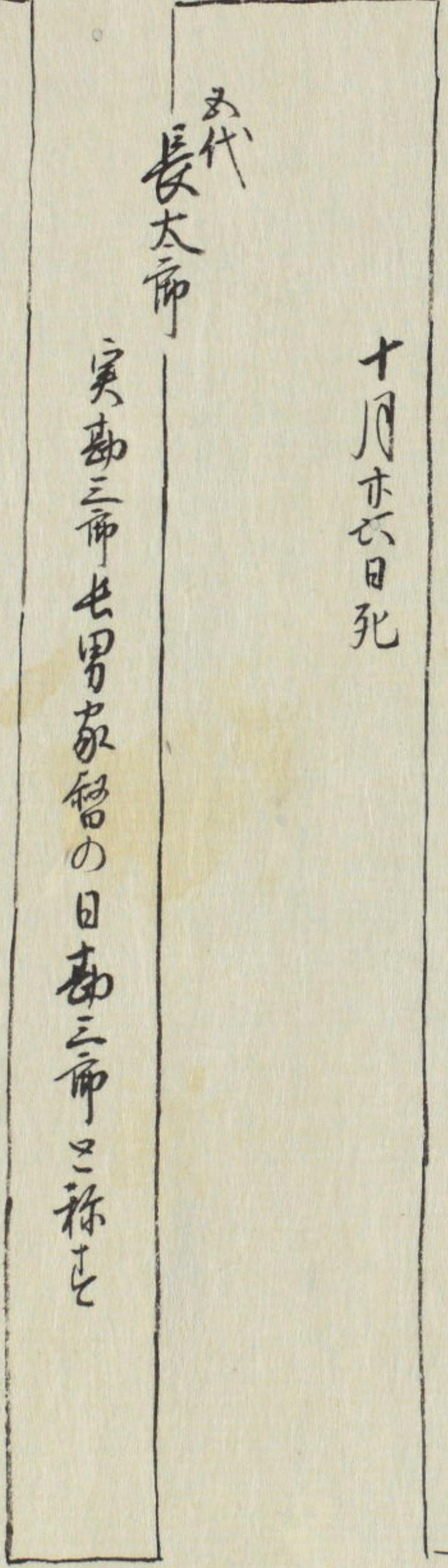


巳代

傳九郎

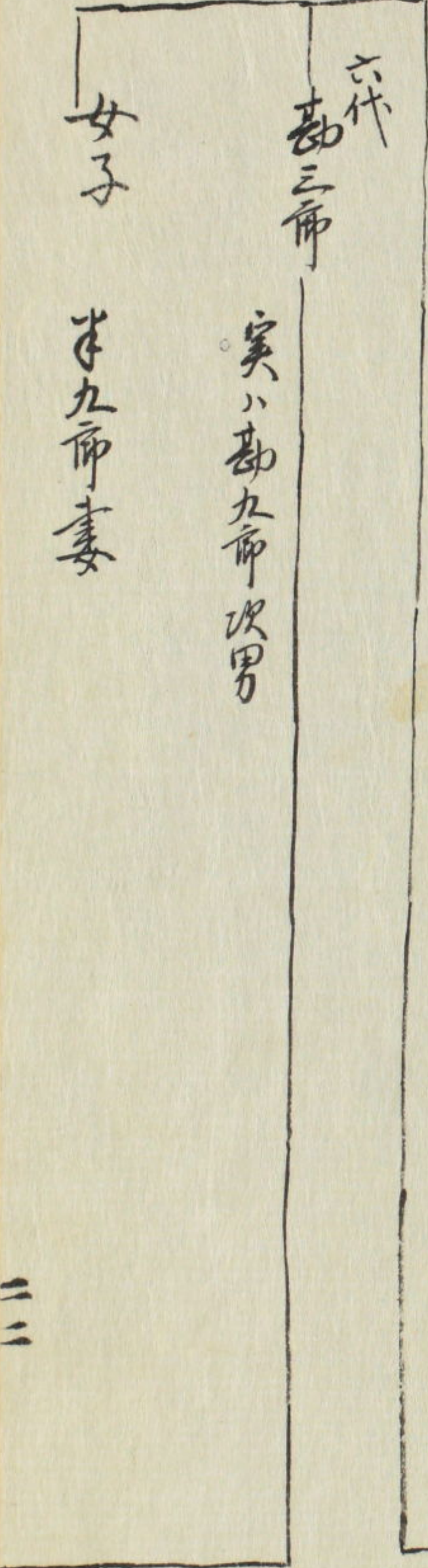
家督と稱中村勘三郎と稱す
 猶若取取の上存正徳甲午年

十月亦六日死



巳代
 長太郎

實勘三郎長男家督の目勘三郎と稱す



六代

勘三郎

實ハ勘九郎次男

女子
 半九郎妻

七代
傳九節

始明石と云延享二年改名

篠若末由加くの古く〜その外は三節この劫三節
以後のりの如し

茅場町の事

一 往古は神田橋か小茅あま〜まきありの懸花か及ぶあ付
今の茅場町といふ西〜川さきはこのころりり川とも
むか〜川のかの葦志けと泥地かまきありの瀬〜と彼者
とも地をわ〜〜住居高賣仕は〜このり田は越て懸花の地は

於糸田又か庄橋本橋東南の川端か移さきて〜今かむて
彼地の葦高存在するなり

一 通町筋も 大敵公の津代ま〜は今尾張町といふ所の
東側ハ汐入めて〜と浪うらゑのせ〜と如し

か後屋敷の事

一 坊上寺表門東海瑞かおのてか後た馬助か明
右徳公津代寛永中奥列舎津右守か〜 作付は拾貳万石余
〜下並の家居屋敷と〜して一丁坪場りしおひ多〜〜入用と
りりて波赤際と築地か五ま〜昔信り〜 住居は是れ

畢竟は漢の心志ありの爲大才後とてやけかこや
傳ふその子孫代々やかこことと云

一 五所の事ハ 神君の内中知りあり一は六個目は陰陽の
史の裏町を用いらき奇目ハ陽の夜その町一節つね

申橋の事

一 申橋といふところは今の中根本町の川筋

御城の堀まで堀通し一は通りの下申橋止まりありゆを
申橋と申多る 御入國の後より 大猷公の御代
初めてハ彼橋と申り 御城深きとを平地とて春日

の房と同所也 大猷公ハ御代中よりお表といふを女
丹の御城屋敷とて所を御代とて申すも申すも申すも申すも
大由番とて勤仕する小川は先づ先祖より御代は先づ
屋敷は麻布長坂の志とて申す

呉抜物商人の事

一 本町三丁目表城を御代とて申すも申すも申すも申すも
は御代初より申すも申すも申すも申すも申すも申すも申すも
立て腕申呉抜物とて一三端つりけて居多りけきとて申すも
大谷申呉抜物の御代とも申すも申すも申すも申すも申すも申すも

しつゝくねやとあれぬいもおりくねりし由本馬の古く竹母
てあまを志河らん上の方母長き竹を横へてそき小兵
腹物をとりけてかつきありく割衣のそくのねりよと云云然
しして彼者中町母賣店を出ししてより日を追ひ月をま
て京大坂よと兵腹相高人が町母けとい集りて今世の
ふと紀の教百家といはねまると

一 京橋立賣といふところは凡 巖有公御代寛文のところ
まで柳の高人おのきり賣物を持って立並ひ賣あり
口舌中江浅草芝の場よりおて賣あり事由縁の介あれ
やりねりし事ありしと後時後場高店出あて

自由母ねるふよりの川とねく立賣母買母ある人ねく
彼所の賣物絶多ると立ねりく賣多る由立賣といひたる
なり

御三家の事

一 大坂御征伐天下太平の日 神君は次男方の由定光義
並に頼宣は頼房にまのりて子孫の後まても三家と
御中丸母そしむらき天下法護やととと一若
御中丸母 御副子あきねき日母至ては三仁その時の列
母あさりしてお漬あえしととと中義並に頼宣あは

御方法護をせむと云へし——頼房はせむし 將軍の
御名代と云へし——その軍用を初は海の城地吳國の征伐等
お知るへし——と云へし是れは各別御名代 城の繫と云へし
水戸を依てせむし——ふさきにはこの故ふ 將軍の
御魔を依り採らきて若し——山後由征伐と云へし
將軍の御馬おんせむし——時と云へし水戸家御陣
せむし——御定の御りせむし——いりて先國中御代
せむし——御年三月十三日より八月十三日まで 公儀小役人の

組頭以上御方法護の列多し人毎日記書御方五人三人
と云へし——御十人百人ありともその日限の中一度御書
院より御上りし——一汁三菜の料理中——又多しこの時
御主人出らせ一人おんその名を呼りけし御書と云へし
せむし——御書と云へし——公儀の御定小役人
の組頭より——御方法護の列多しその時の小役人の
御目見せむしは 御目見以上の列と云へし 公儀御方法護
の列おはせむし水戸家 將軍の御名代と云へし

公儀中人救扱ふ所、時そきかききて水鏡中の列名、
西ととん知、ちとき給りんるお右のふとく、梳飯行
りき、一なりや是の水定也、水戸家元和以来江戸常格
めて出入い水磨野中いよ海とて毎年百日行、改帳
る、是す、一武用のなり、多し右と疑たるゆゑ
最右公御知方の方は黄門光國にひ、と在江戸と
天下をひくさや、きあるなり

一 浄城内吹上出の介尚世 月光院様浄波の地尾列家

上屋敷なり同福初の逸水戸家上屋敷なり、日蓮傳友
中腹の地尾列家上屋敷なり、十六の元和、末明暦の大火の
前、すて、初大火後、只今のま、と、浄三家おの、
御城介へ出らき、一なり

一 浄城内とひは、そのむか、一この出、介小腹初半、居住
や、一なり

本石就上の事

一 慶長年中、江戸城内造営の時、西園口玉等の大名おの、
依知の本石と、お積り、と、あり、と、よ、浄中丸

中の出づかむりして右のくまの角石のまらきて大き
なる基石をば肥後及石と号し其まか及肥後と清正肥後
熊谷の大守とて就まらるるなりその出づかむりして
まらと飛の向ふの石垣の中か大石か大孤石と切付ありと小
孤石と切付あり石と二つ余程大なる角石あり其まらと清正
就まらるるなりとや傳ふまらとそのらら清正の就まら石被
七被風取れりひて赤川よるまら里をかりの海上めて破換して
その石まらとく水底に沈めらるもの今か七ヶ所存まらと其ま
泊船の人のまらきて均相ありとて舟を漂ふるといふを

其まらと根泊とりかその下を孫と号し其石の略云なりと
云云

事蹟合考卷二 年。

事蹟合考卷之三

神君御政存の事

一 神君御政存後、神のきへ御政存とて御泊りけり
被_レ城へ御入_ル程ゆとき、御自身ハ淺黄深の袖の小神
小倉織の本錦の小給羽織甚ま草の御巾着、黒き長門小袴
お瓢箪の根付をつけ多るを御下け、小極小依小の女中ハ花
色深の立波お汐汲桶と、小腰小かけ、小白小したる小苗
條の本錦裏つけ多るを打をみ着て、小白小き布の小三尺小掛と

いしきりこみ海きりく 餘りといふきりきめてかきけて
馬丹葉多りおあり 新めて三人程ついでに多り

加判光言の事

一 加判筑前守光言 大猷公御在世の時三十一歳めて子世
やうきし初まこの時ハ正しく上座常盤橋のうらめて
この亭母おのて光言卒去なり其向ふ座女御前家
閑基 秀康中納言の息參儀從三位伊豫守忠昌末任
やうき多りたのき正しく 大猷公の御從父兄がそと

田親切地母形くむねく 公儀より 忠石深かりしり
人海の外の大沼めてあきありいぬ光言初居死去の程毎日
大猷公より堀田が賀守正盛と 上使さして御内意
御付りけその方美格別母大切母思石いそき母しり
筑前守子世母付てそ方乃く大沼めてあき初りい石
たのきのい由葉く 多程い向後は大沼お止くき石初めとの
上座初まこの時伊豫守領冊石く一首の程分と書て由返事
りしきり多り

むらじりおふか炭の筑前下戸おきけ

年一てきのお死り

大猷公このおをよと 上覧おあり 御答ひらねと
おともねとておおきとねと

加藤清正の事

一 介橋田年慶堀家井仔炭の上屋炭か炭清正の鐵砲と表
内お小堀外極木の古木おしと極木等しと極木の
このお堀の小坂を云倍かこの木坂と木坂と唱ふ

ともこの木樹も明暦大火後植替多ふりのと知るへ
清正時代も然るり慶長の半のころ清正肥後守とて
江戸お糸向してこの鐵砲居住の時帝釈兼光とて
その長さ尺三寸お作り多り馬お繋りて 御城下を御細
せしおその着用の槍鯨尺めて四尺三寸ありしと腰の
三里おりかかると多ふねり佐前兼光の長さ三尺三寸あり
りと名帯の服括とて多りさきいそのこのお堀の町合
を年り小堀お

江戸のもつりおさつりいささといふけとささあま
たしあやぐりえ

とうあひあがりぬりその大兵推て知るへ——きく井作
家の中屋敷は若海遠の本戸のうらの屋敷をぬりら
か反清正造物——あがり中しめて凡二百年ぬぬいて今も
なり新焼やたしそぬまをこの屋敷の表門の冠木も清正
長々三尺餘の黄令めて虎を他り並敷と有りぬるよこの
飯初日お曜て品川浦英船るきさうりて橋権ましくぬくたるは漢
人陣の介後世難美のよ——歎くお舟被敷を敷しぬる

とりか事古姓しを武家の口碑み残るところぬり
け屋敷すり玄冥は落極のところ板敷多るきと平石を
敷階多るしよきは清正をひとりお附階版の上よるを並よ
るを志平共のせ紫板みあふるとぬりさそその玄関上使者
間とお母——きおよは方障子ありぬりとも古風お襦
ろき障子ぬて熱その骨本の外の方袂の筋かきと金
お方へまぬくお袂の櫃をば思んありよまきハ清正およる
来る使者ぬてもその外の武士ぬても心おさるぬものと

いふ多るとき先づ入きて挨拶の家来その口上何れも
も夢そきお西遊へて退く時子孫をさうさう
立りところありてその中おなるもの多きさう出る事
のねしうさうやうお志多るねし諸事りやうお武用を
心掛お怠りたるものねしと

一 伴蓮家上座は日比谷内日比谷の外高村橋田内用座とりのねし
この座お伴蓮政宗一代住長なり

内座家座並汲池の事

一 泉御門内内座後守政樹上座永田三場下のねし内座
能守も佐具上座とりのねし友座汲池の上ねしと

神君の舊臣内座右京亮友京清長男源治右衛門清長是後守
家前住

二男玄丸是後守
家前住兄弟とりの小武功忠臣振群とりのねし

神君御憐愍ぬし 御入國以後この邊地よりお移りありし時右

兄弟の人お 御自分御杖をりりて賜りし居住地今も

りりておのく上座とりのねし

汲池名所の和歌の集り

ひき〜ぬるさやまぬ池のこころな。

ひけはたへる歌をたへしるふ。

とあるりびあき西〜〜信ふ汲池とあふものこころなぬ
りら狭山の沈ぬりと老岸や傳ふ月〜〜名前の集め

狭山 武苑

千載集

八月や〜狭山の存めとほを火け

五五の多〜月は星かとそらんぬ

あまきま〜老岸傳へりよまぬりら汲池の上横田山王権記の

社山正〜狭山ぬると云云

湖の射渡の程の事

汲池〜秋澄の事

一 台直公色は湖の射山味渡の程とせぬ〜〜放さる路の
今みり〜り存生と云云

湖めて程と獲りしめてそのほ〜ある茅やのほ〜〜ある
右茅めと〜と中〜からけて菰め入て室冷及申六日つ
めて江戸めあるや〜みり〜とぬりよ志さる〜とこのま〜か〜

けとらきて水も放し磯菜を春まきいふらから活て
おとらぬり鮎も同かぬりも川とも冬の日ぬくては
江戸もては五よせかこきとぬり

白魚の事

一 五玉川筋を始江戸表の白魚は
神君の御指図めて尾列右古屋浦の白魚と申五ヶ所せりて
まかぢらきしもの今ぬまて生城と云ふ
春のまゑしこ白魚の子とりらぬと多くぬりそのま

舟乾しそ網のおき冬ぬりしり汐のさし引はる磯端を
結ひ去所舟堀切てその中へ汐のさしひきさるやうに
しりし浪もきぬやうしそその白魚のぬり
多りそそのまし浸しおくとおのつりその魚子ほこ
ろしりぬりぬりの大きき小ぬりしりしぬりしそ白魚の
かこらと城し多り耐そのかこらとさくぬり

芝草宿下喜松寺門前

一 大蔵公御代の末すてい正保参安のころまとも葦沼の汐入
めて六月の突天ぬり奴僕舟中話を扱えてゆかきまは性来ゆ

かこりりしりるるかこちふるその地とわりしと云

龍舌町八幡事の事

一 その始ま山因横も喜山の屋敷園とわさるむる鏡張下知
まらとて繁也——多るる長——そたふき多るるをまぬりら
この屋敷小宛の除地埋めその地中八幡宮のわ——きと造管
——多るりの今中ぬりて福をまふき龍舌町宛るるれぬ

尾張家市右屋敷の事

一 尾張家市右の屋敷その先甲賀者の宅地あり——と半込

の地中つうらさきその源のう——んらきいこの地はそのむり——
平地の芝原めてさいきありいところ 市入國後小桑又市右
——そ住居ありとり——とも小舟者のますむい修か——そ例と多る
と古小桑原と叫び多り——地あり産古の八幡宮も
宅地鏡張のうらたきとも古系筋の多め小宅外とや
きこりり——と云

龍舌家屋敷の事

一 龍舌家は赤坂市門外下館へ明暦大火後小移らき——と

そとまき三家ともふ 市坪後西北詰護の沸臭意ありとて
糺町五丁目の南詰と——今廿管他古代の丁嚙ねりものハ
軍基安度帯刀存立の日南院沸業若きころその地所所々
造他やきふねり紀別家傳代の在旨の本村言敷中後日
そのを——南院院この版と造営や——まき——附大工——
始諸職人雇積及し徳色入用の代積み置りまてか——あても
採きり事ねくその若のねふふと五ゆや車刀古持等行
と出——そ若中ころふとみ休まてばりいま——造他が来

——そ家后ともと取か——物とけ度の造他おかろる二通その
介の工とも枝本中の高人并日雇まても利潤を被りしり
らかに向き——附を后とも中ハ由屋安造敷十町に方の云氏
と——よつと子伝まとも古持り——多目りぬまきそのう
快おたるらきいものハ振群の沸熱意をわ——むと職人高人
大み利値をう——まきいゆと合せ由所とかりみてのま若ハ
仕合とやせはそのと記南院院見よ焼ますひねとやさき
——ところたる——そ元文の今凡百奉お及て煙も到——

さうしと後せしと知り古将は不後尚世浮存の爲の
ふときとは日を同しと知りくく寸難有く大急を
ぬくも有り事とも知り

水戸家屋敷の事

一 水戸家も今の小石川中下鍛冶宅多るものなり妻の
妻も今世のふく知り惣家中内通路ハ大平陣指所
の方此妻門と用ひいらきし母りつと知り農人新の
ものびつ外母出がハんきハすし改るとん元農具の取或と

雜具ホも母持すしは背母負ひ知としと通る知りと
或ハ農女とん元てい知りひ多る衣服也性来正るもあり
右の指子数人ともむ事もせるとしハ元彼を改修後
十六年母及り志知る母あるとき十八九年申知る農女外
出て知るとん元ておくの雜具を母持て門内母入てり
くともねく性をき人の足恒教年世類の者性来不實母
あひその故をつけてんし母今の庭母造りき及る方の
山寺ありつらつとつ志けこの申をわくそのまじり母とさく

ほけぢさけまハ農家十八ヶかりあり山村ハいささかのすまか
よつて世は怪帯の事おろしハの家お入りて夏ハ何と
り村を世水戸及板根の屋敷内おるりその事ハ人々お
知らざるかといひはまハそ農人言て云ぬともいひし
しつこの所は代々居住しつといひさぬを年他村を西
出の門掛も出来ぬ板おもい領外ハ事ハお板の中とよま
およつて是怪帯りして石の和子を上役人お中画の板お
房の早お入の所中納之殿そのおおつてさささささ

すまある故その海へおてお房の遊去後その家留光國ハ代
中ても住居いつてお籠るおの唐三ハ服類焼後光國ハ世岩
川の屋敷を上に屋敷とせつてきて庭前お山水を構へ(東海屋
江戸より京御中への所への風景を写し造つてまお
よりて彼農人をもと業鴨の下屋敷お移さき扶持をま
らまその庭中お田舎板おせつてまおりやうお田を他らま
その稻の植新あつていハ麦おとつりい農新を勤ま
まおいひし事今おむり年へ他業彼農人の男お女お

さらさらり

千日谷の事

一 類ヶ橋町西の竹藪に佐濃町およぶ故に中としての谷乃の所を
千日谷とす。小永井佐濃守尚政の弟後より刺撃して
降亡宗の存心者となりこの故に二層を築いて念佛修行
しして竹のしり終ふ寺院を建立し千日不退轉の常
念佛を誦願し多ありと記千日四向の修養とつとあり
大まに戸おのりて千日四向のそしりなりし也。伊城下の

事蹟合考卷之四


堀田加賀守の事

一 春日居上京の次子貞徳大垣造お浪人しして居る佐前
守忠多家の家老堀田勘兵衛の子及之郎官後英しして
後文別法お足立おり川とも居るの理多りよしと云ふ事
江戸お下向しして後友徳反脚方
同居其後大猷公へ由扈從お出
とらり三三の 御意お入めて終お天下の元をとなせし位

下将夜加賀も正盛といふこの人在世の日淡路通話所の
小表めて方二町をかりの下屋敷を御殿を子孫にしり傳
來なり 大猷公處〜この下屋敷也 御城を控ひ庭前
小方の築山へ ぶ〜せ〜き下谷方の平原と御をえん
り控ひその時江の腰りけらしこの園石今小築山のよみ書
りの小方堀下堀水の介よと見えぬなりと云云

實盛嫡流の事


一 延享中大内書組長井忠次而一系は丹波別當實盛嫡流也

今〜まきられぬき正統なり實盛一系伐り自宅を以て自
の仮名実名を書録し一系圖今おむり御持せり岩次而父清
太史語り告〜あるハ一取等四百石代〜傳伝の地は武列
の岩掘めてハ實盛舊伝永井の庄十八ヶ村の庄小例めてハ
今おめて先祖舊伝の地場いらさる事跡急ぬハ又今
戸中津古宗めて江源寺といふ寺内の墓所ハ紀伊國の扁
書なりま〜〜そ形  かくの心き原寺曲尺めて三回す
えかり幅壹尺六寸をかり長貳尺六寸をかりぬるもの也

下侍夜加賀守正盛といふこの人正世の日渡東通話所の
小表母て方二町をかりの下屋敷を存候と子孫ありて傳
來相傳 大猷公度くこの下屋敷也 伊城と稱し庭前
小方の院心へ ぶくくやまき下右方の平京と伊を言
と稱しその時北水腰りけらしこの園石今小築山のよみ書
りの小方堀下堀水の介よと見えぬなりと云云

實盛嫡流の事

一 延享中大由書組長井忠次郎一系は丹波別當實盛嫡流也


令々まきこれなり正統なり實盛一系也々自宅を以て自
の仮名実名と書録し一系圖今おむりお持せり岩次郎父清
太史語り告しあるハ一系等四百名代々傳候の地は武州
の岩槻也てハ實盛舊所永井の庄十八ヶ村の重小例也てハ
今おめて先祖舊所の地場いらさる事跡急也又今
戸母津古宗也て江源寺といふ寺内の墓所ハ紀伊國の扁
書相るふくくそ形  かくの必き厚き曲尺也て三四寸
えかり幅五尺六寸をかり長貳尺六寸をかりぬるもの也

一字讀

下将夜加賀守正盛といふこの人、在世の日、淡路通話所の
小表めて方二町をかりの下屋敷を御殿を子孫に譲りて傳
束ねり。大猷公處へこの下屋敷を、伊城と稱し、庭前
小方の築山へ、うゝやゝき下谷方の平原と、伊をうん
と稱し、その時、江中腰りけらし、この園石、今小築山のよみ、古
りの小方、堀下、堀水の外よも、見えぬなりと云云。

実盛嫡流の事

一 延享中、大内書組長井忠次而、素は丹波別當、実盛嫡流也。

令、まきこれなり、正統なり、実盛へ、末代へ、自宅を以て、自
の仮名、実名と書、鏡山系、園今、おむり、お持せり、岩次而、父、清
太史、語り、若し、ある、ハ、家等、四、百、石、代へ、傳、伝、の、地、は、武、列
の、岩、掘、めて、ハ、実、盛、舊、伝、永、井、の、庄、十、八、ヶ、村、の、由、小、例、めて、ハ
今、お、めて、先、祖、舊、伝、の、地、賜、り、ら、さ、る、事、跡、急、お、ハ、又、今、
戸、母、津、古、宗、めて、江、原、寺、とい、ハ、寺、内、の、墓、亦、ハ、紀、伊、國、の、扁
書、ぬ、る、ハ、い、く、ハ、そ、の、形、、加、く、の、ハ、き、原、十、曲、尺、めて、三、四、寸
を、かり、幅、五、尺、六、寸、を、かり、長、式、尺、六、寸、を、かり、ぬ、る、もの、ハ

玉板古代の筆跡かめて文字ありさうなりなりなり壽永
二癸卯六月の字も見ゆるなりその版刻も志行しき
新ありふきを實盛墓前石といふこのより新の古中
より堀りしき多りといふ元來世帯は江戸表ありき
ありいのころ後來この地ありけりさきいしき

懸戸柳瀧村店屋の事

一 懸戸村の西の所は柳瀧村といふ一軒ありこの店屋は
代々浪井氏ありて先祖玄庫といふ者の代めは天文

年中里見小糸瀧の臺の合戦の發部ありしその時は
村中の男女ともふこの兵庫に家内小入並はとり高亭
まは活節たつといふ父の一膳とて弟本若めておのり
きを至人取りしり享保のとき身中かりぬいましは徳の
時お他の多り造化とてその家の柱皆徳絶めて削りある
今お存在をこの第屋兼六拾俵めて他り多りといふ
まは古來淺吏しき時代諸色兼めて交易し他りたる
ねり隅田川渡りの船屋入といふところの神明さまの

神主系譜にて曰世倍より少子系系國丹千葉女魚淵の系業
身淵の子次而惟孤家臣置城守と一男して女家女對し
合族して中総州入その後古田及薩と戦武州石濱の味よ
若臣をよつて惟孤子孫と少子系系石濱の流といふと云云
け石濱といはさねりら神ゆまの地なり今おわては汝入
と唱へしをねたらん城地と中も宮の水の方多りと傳りし
ねりと石濱と當時よりととねり来りしとねり

友國橋并由米菰の事

一 佛入國後 佛塔下東流荒川は佛は大橋一ヶ所もあきねき
事ねりゆ唐大火後了治二年よりめて大橋をヶ所りけ
らき **下** ころの今の友國橋なり延宝九年十二月酉
辰焼し多り時この橋焼落多り元禄十戌寅年九月六日
山下町より出火して三谷迄中を焼焼し多り此の東
敵山 初願内玉着の日ありて被願通りより跡より火
あつりこの六日火事後由米菰築地西中願寺の南東岸
海堤お移さか友國橋は元の所よ返りかけらるるの

今の五里橋より彼築地へ移さるる由米菰汝風にて
米あけいよ〜ゆて享保を〜ぬのころ浅草由菰(彼の
米菰を亦ぬさる〜きいよ〜)なり

新大橋永代橋の事

一 元禄十年のころ新大橋を〜ある同十一年中永代橋りけ
らありこの時を中(阿波を後も正武河跡随見中)〜さる
いあり加(き)由仁改めてはぬきたる氏通路のぬぬ
公儀由夫邦野安をも由願ひぬ〜大橋二ヶ所なきてりけぬ

何と大水の時分ぬとかり〜いある海〜きやと中(阿波)
ん着(い)さきは大水の時分は川上田地四り石もかりぬて
い〜みり庵〜と着〜り泉〜て宝永元年利根川
筋はぬぬのきり草ぬぬの橋股等あふきて千来の首高尺
かけてこの川よ字石解皆〜り〜ぬぬ

中(阿波)橋の事

一 中(阿波)一目橋通り(草)ぬぬすて堀通〜〜一三(口)ぬぬの橋
さりけて通路ぬぬ〜ぬらぬぬ〜ぬ

台徳公の御代元和寛永六年の万の義好也

一 中洲の和親は古来ある川島守母とありいと貞享
中洲田筑前守正俊元をこしく年々山夫部の上し
めて安宅丸と名取し一母好さるり附彼大和守重
川の東岸の地越中和親後しと好り

本母寺の事

一 本母寺の御堂は 農有公御建立なり本母寺の額ハ

本師派一族京都府有る建康の岡基光悦り等々
この中ハ湯殿山行人流好也仔細物候母業平朝臣宗
流浪の文章ハ隅田川の渡しよりこりて縁奇ありし
との趣向と云て隅田川といふ縁を傳り多り是彼物候の
奇也

名ありありいといふこととらん好也

且つおのり人けりいも好しと

といふ縁向のありや好しと云ふこととらん好也

うしむい多の母の相人といふりけ多しこの信徳も
延享の今ふりては稍は百年来及び事由日な
國中ふりては遠くを境め及びい多しこの隅
田川といふ事まことの角田川かあらざるか
らりよりて人彼信ふよりて梅若死骸を細の多
るりてて柳の木を極量多りもの末代か
終ふ一の古跡とあり多し由他事方の町標梁の海に
九き番といふもの呼名なり重筑後と号するその故留を

信申といふ事きを今世三代をかりてふなりその筑後
二の坪曲人者取相の上より二匹のふきなりこのの
十三果のとき牛若丸と木めて昭他一多しそのは
かの 岩有公寺院御建立なり一なり其り附の木母
の住僧筑後父と名はめてときふ拓きてその父の許
め来りその牛若丸の木像をとんでときふ然るにそ
筑後父子の信じてさくさく一はきハ徳く一葉木トド
我亦寺の梅若丸の像めむといふ物ハ推入りてきよそ

彼傳ありたるもの今わいり被尋の女像あり

上水の事

一 江味下よあり 神君御代田吟味ありて尚世田葉子傳の
先祖大久保茂十郎あり 作舟水脈考に江味せしめ江戸
御代田のうら江味せしめ小日女橋より今秋橋と隔る所
町小及び流地も多麻川のありとかけらるるハ正保年中
始りなり世傳ふ日女橋京橋と隔る所なり是日遠在所

母ありはとせしむるは後徳元元年のら流あり又
江味あり落合中野等のあり松原の舟天の池ありと引て
小石川水戸家の女館ありと水通海の小浜岸を隔り
其女橋の田をひろくせしむるを小石川上水といふ
まゝ 常憲公の御代のら板橋のあり錦川の南の
方石原の代の方より女御ありし柳原筋ふいげらき
水流と小川よありといふまゝ 文照公御代葉子傳せらる
又女伝ありて後濃川といふ水流を葉子橋筋ありて

小でまゝに中舟をりきしを白垢上水といふ
まきも 常憲公御代と 作付てまきし
文照公の御代舟停止しふその上ある川筋今も
業平橋の東水の方の橋際より菅原世継村の如く
通つて小川一流ありまきしとねらふその白垢上水といふ
水筋なりしは樋の造化せきとて汲ねとさし引
まきありしは樋の川のなり

聖堂の事

一 聖堂は元末東叡山中今の山王権現社の地小ありしなり
常憲公の御代神田明神社前頼高人とのあまきしなりし
町家を焼してこの地ふら川をまきて大城を築く
もの今に存在をりしともその弟創の日は元禄三年
なりこの時の標高御言入佐杏権三門の三層とも小持院
從二位権大納言後永基時々なりその後元禄十六年於燒
しありしと云ふ路ありし 常憲公御再興ありし
ときこのその三層の標高は基時々の家督中納言永基補任と

きしりのいすふいりておまこと

亀戸の儀の事

一 伝祐在世叡神の師法性坊の跡園梨奈玄僧正を彼龜戸の
中庭の真方小祭るそのまじめは鏡の茅堂實前も茅
さしそおろそりねるものねり室永末新く小造堂
しそまじりねる堂宇とねるまじり志かみ上野の
園の儀山けかの法性坊を祭るよまじりておまの
土人い川とねくこの龜戸の法性^性坊の堂とめり候と唱ふ

とねり

梅屋敷の事

一 梅屋敷の梅はむりし七葉の童子実梅したるものがく
増長し多りねりと性年及堂家とかや大月の家お賞
りよめて移し植多りおらう候よかぬ事もあると
稍ねる新おねりし西もそのぬし返りぬきは
まじり植おきしりいまかゝ懸着し多り月の勝なる
泉付しり七葉たりの童子彷彿とあらしき出ると

事蹟合考卷之四

事蹟合考卷之五 大尾

高橋の大佛の事

一 台直公卿代は城下におおて孫友和と巧く類の悪事と
 せし從黨は敵合ふ拾七人赤川におおて磔罪せしむ
 然るに^然出るに縁多きもあつし是も人々の誨教し多し
 幸あやふ中の一人を突踏しそりもや突踏る多きとて
 公儀は人御の諸事を細めて治しれあり然れどもその
 突踏さき多き罪人殺の心地しそ志をりつけらきねし
 その日も申言多しおさし夜も耐ふがらるる由家門の

花柳通り形を彼の罪人などいふはけりなむらびきく
事出後の通り自らの罪神めりてかくのまゝとく磔
小加へてい物のおあきより裸多きも実来りしり而も後
おわさく——と実き跡——あつとわつて出役人仲も
裸多きもの刻りてせぬおりもことし江戸松本町小
番住り——い佛師の又七とPのあてよりおふ一命助り
いもひくお佛のめらこいこのよに二こい倍とてくま
お存をさく——もあ——出家を遂げP度はあつて何と
そこの縄を解て流りきとりその時かのお柳も居け

さへはあり——くまんとて縄をきりておね——い
そのまゝ下におつて花柳小一礼述へてまじりおふ宿小
立地の妻子等おね——い沈む居いところへ夜中ひそふ
立地のいけお妻子とるつきて差のめのとねまかなむ
とき又七りお中へ家よりあつてその方ともと答さんて
帰るあつたあつた物へのまけとて死とのりき——
あつてまきしりお出役——てこの罪障を果す——
りりとも佛神と刻すんとい急預起——ありとるあつて
細工道具とるしお帰したるして生涯のよりきとお

とまじくしとく小上総の天神山の野山奥小いりてみ智業
と刻みあり彼ま小下流あり——あや去人も跡の外小
伝作しそや——ねじ重多り終ふ程十年の齡を^歴磨て
山岳——彼み新の大佛と刻み立城籠——多りその比
髪髯その小楚を礼——多りやくせそり川も山岳の
のち——あや木の実糸の果を^食合——そ后多りと
なり去人もその丹珠と感——その^地地の地改代なり自
然その佐実と感——^道道^心心儀——右の種子明白小

ことともねく知きも——まじく上もあつるところ一皮
由は直ハ海多りのものさや——み不忠儀の死を遊き多りの
格別の後めて津猪の事なりそのや来は戸よ移——安重
ちよそて三滝の海岸めて寺院をたまりりかのみ新を移
——願ひや多りま——小^寺地院を建立——かの又七入
住僧となり多りまき今の三滝の大佛といふ右の又七
入居ハ本食但唱といふまきなりりりとも^宗宗基多り然
る小室永のころこの寺敷焼——てかのみ智や来燼滅せり

その後度々の敷焼申園東に敷の石一宛とありて敷
立多り長き丈をかりの二五尺門立多りりく多ひ。
焼換して終小延享二乙丑年二月十日をかりの焼七申
まゝ焼換し^命の^命と加へも^命なり

増上寺申布引祝言の事

一 丹羽希庭長重奥列二廿五拾万石解の
疎之在園の時疎下と熊野長者の農人馬お乗行とんて
さて^命あの馬駿足かゝるゆゑとて^命後^命と^命家来小中^命

とありそのまゝ家来彼長者お子細とかけまはせぬり
長重ふあゝてまゝなりとまき^命と^命その馬小乗りて^命
むる小地^命系り^命誼と^命いひ^命云り^命か^命り^命下^命の名馬^命
長者の^命ゆゑ^命多^命る^命名^命を^命長者^命と^命名^命つけ
多^命る^命長^命重^命と^命か^命る^命名^命馬^命多^命く^命ひ^命も^命あ^命る^命

將軍お^命秋^命と^命中^命と^命て^命江戸^命お^命奉^命せ

台^命徳^命公^命お^命秋^命と^命多^命り^命公^命の^命馬^命小^命石^命さ^命き^命い^命と^命あり^命お
不^命お^命の^命名^命馬^命の^命よ^命と^命上^命を^命め^命て^命終^命の^命外^命由^命賞^命毫^命と^命極^命ひ^命き

近と追ふみ布一場と後編み垣もみあやうし造ひつけて
追ふみその布一文字み鶴を也み及者の名を改めて
布引と名つけらき多り大坂御陣の時也

古徳公の馬小 百さきたるも成る小寛永九年正月廿四
薨云一治の附 御治世の日務きてさくみ今の温徳門
外へけりりのよそこ移ハ彼境内めて芝京移り一みこの
ところみえね一御みさやうきてさく一たりきハ彼布引
ねり一居るうらハ毎月廿四日を中 御谷代と一と増

上寺表門一と糸路や一ありみ移て新七附一と表門の
うちハおのきと歩み移きまやと一い 至中通一ありを
えかくる一とそのま一糸路をあり一とや一と居てその
ま一ゆり多ると流小一度めても遠く事ねかりしこの
馬車と流て死一とあり付一山その名馬多る事と感する
の解り方より彼馬と境内よ埋めて幅尺余程は八尺
余六七寸中より取ハ御形もあつる石塔と建多り志かり
み彼寺住者の間基文周方より一造りて加の石塔と

中をそ〜て堂を造り馬頭観音と安置〜多りたしき
今世おりのりて諸人衆信を温樂門のうらの観音堂
さいきかろし

中をそ〜て堂を造り馬頭観音と安置〜多りたしき

貞享のうら京都お佛二の上にお九き指といふものあり
津の弁邊お佛てせんか〜お〜英禪流の僧の新
とね〜と松雲と号〜江戸お有り浅茅観音堂のむじ
のか〜川戸の町西お佛り長〜毎日彼堂の東北の

通法竹門といふおよおめて六百羅漢と 江塚お建

立せんとお願を起〜て先彼本像一尊を造居て自
ハそのお〜常に羅漢像を刻〜難波洗眼和尙の弟子
と稱〜て氣息のうらもお造の繁^葉にまめて教日淨〜ら
〜とき淺茅山お前を鏡の茶商人の隠居を人々常ありら
連立^山三岩の寺〜の流法を安あり〜たのりおかお松雲
り勅化のふねを安めてさ〜大正おり津街^山おま〜ち
か〜と添〜ん〜て俄お淺茅寺の塔頭壽命院の門内ふ

廣く地を借り、所傳安堂の飯屋と五松雲ともその飯屋
お引取りと武家町人とも小羅漢一軒建立の施主荒木
よと蔭を被成就する中々と金子あまつと定めて部
のありともりとも羅漢新お雲形の諸解を立つとまこみ
施主の名及びしつらさともころあのと七人の法名と漆書小
しそ加つ一軒の羅漢の字号お百羅漢助合の教名
とも漆書し多りまきををんてしそのころ万古末
骨ありその盤花の江戸多り海ら施主出来て新改年のうま

成就よりこの時 桂昌院尼公この事を夢しし古きま
し施主まねししきしき津云禁そひ多り也本新又橋の南
おおのて寺院地三百坪をかりも賜りてまふそのころお
飯屋を佛の釈迦佛をとるしめ熟羅漢との介護法の音律
等を移し安堂し不日お入佛依養の法事を修り
し多りしさい元禄八年八月の事なりその依養
公儀より日限三十日とて佛坐しし不日晴天三十日と祀し
祀り終ひししおあつてたらはら関門とて佛坐しし

るねりて藤ねりて飯屋の祈友大門ともねりて
くら竹矢末めてそふんの園ねりしを回らねて
まき新なり此其後年を誠へて関門 御免許
ねりてこの表徴のあつて松雲も病苦め志願して
死し打渡して二代も同流の僧任持し多りといふ
不^得ねりものもめて室おかの飯屋も追年冬落し
佛新及び経漢も西漏かゝる荒らて目とあつて清き
かゝりし凡世年乃元禄八年より八九年を評て同

十四六年のころありて中寺龍波の誤服よを何とて
この寺建立し経漢をも末代云際安直とらふ
とて任持上人此僧を一流の中めて撰ひしころ象光
和尚といふ僧を慈母あきりてこの僧小命せし
ころ象光とくとり管しといふもかの地ふ下向て
彼堂建立しし御ふ拾六年のあつて寺務をゆる
さししころありけきいりゆるともその方の心次あり
唐しころありけきはよきふりて江戸お中り彼寺に

へ〜自分のうへに微細な樂^質とけひや子^孫は^中被^りま
出入のものと^後いひ^か憐^れを^かく^らい^くその真心を^威
〜さや^と後^に恒^に者^と和^融〜^とま^に江戸町^中へ^毎日
教化^を出^てその^米濟^を和^融〜^き町人^があ^らけ^日の
勤^行教化^を努^め〜^懈怠^をわ^くその^年月^凡或^拾年^あら
〜と^應て^享保^十年^中に^堂建立^し〜^城就^して^入佛
休^養せ^しの^多り^忘か^らに^享保^のと^急こ^の急^湊放^置
の^節 大^佛新^様こ^の寺^小入^らを^終ひ^てな^きと

〜と^や〜^き和^尚の^丹誠^の功^を威^し〜^終ふ^を臣^が堂^の後^の
か^ら〜^や〜^らふ^ふ和^持居^住ま^ると^らあ^は三^十年^修以^来
始^て飯^屋を^立た^るゆ^ゝの^度ま^に完^ま〜^とお^の食^の小^屋
の^ま〜^と〜^を〜^て威^ん〜^と〜^と〜^とその^う〜^らは^は
和^持居^住を^とつ^てな^くと 大^佛新^様と 堂^名三^と
御^威が^ま〜^し〜^し自^分の^事は^意不^もお^もら^れひ^と
お^堂建立^し〜^多る^事之^のの^ゆ〜^とつ^てお^の寺^の
隣^地大^石の^下飯^屋〜^と〜^と〜^と〜^と〜^と〜^と

くくくおき境内か 御体所まで遣他やきくくく
ゆよりて象先和尚ねとくちかくとゆかき果源く
梅くまくと一廉の大梵宇とねくく象先和尚とくく
建立およりて元文のちくくこの寺の奥のかたに
隠居く一切諸人の出入と梅くくくく遷化く
ゆくはことふ天和寛永のあゆくく大佛及建立
くく隆松院公慶法下とこの和尚その功同日の編ゆ
くく象先は一人とくく大才の権ねなくくゆも一は

この本一枚の讀とゆて建立くくく幸若公慶日々と經く
ゆもくゆとくくくくく丹謀ゆり

事蹟合考卷之五 大尾

天保二年辛卯九月廿二日校了
六十八行末醉翁

